

※注意

これは試読用です。2巻『黒の章』に掲載するものと少し違いが出るかもしれませんが、ご了承ください。

また、内容は過去の話なので、既刊である1巻『虹色の章』を読んでいなくても問題ないと思いますが、最低限キャラ紹介などを一読の上、ご覧ください。

第五話 死神と呼ばれた少年

人は、とても醜い生き物だ。

汚いくらいに生に執着し、自らを守るためなら手段をいとわず、場合によっては他者のそれを消すことも躊躇ためらわない。中には何の感慨かんがいもなく人を殺める者さえいる。

かくいう自分もそういう人間だと言えるだろう。もはや何人殺したのかなど覚えていない。生きるために人を殺すことなど日常茶飯事だし、それに対してどうこう思う感情も枯渇こかつした。

そうまでして生きているのに……しかし、自分が生きている理由がわからない。
なぜ、生きているのだろうか？

他者の命を消してまで生き延びる理由が、果たして自分に本当にあるのだろうか？

生きるためには殺すことが必要で、そしておそらく俺は意識的であろうと無意識的であろうと生を欲しているからこそ、他者を殺す。

だが、どうしてそのままでは生きているのだろうか、俺は。

死ぬのが怖いから？ それとも生きることに意味など必要ないのだろうか？

……わからない。

そう、いまはまだ何もわからないから答えを先延ばしにして生きているようなものだ。

3 第五話 死神と呼ばれた少年

この代わり映えのない日常。

言われるがままに人を殺していく暗殺者としての生活。

……『生きる』というのを『作業』だと感じてきた現在。

目の前はただ暗く、何も思考などするなとその『生』自体が訴えかけているかのようだ。

ああ、億劫だ。
おっくう

だからまたこの思考もここで終わり。

結局答えなど見つからないまま、またいつも通りの日常が始まるのだと……、

——このときはまだ、そう思っていた。

☆

☆

☆

目を覚ましたとき、彼——クロノが最初に感じたのは肌寒さだった。

布をかけたソファから上半身だけを起こし窓の向こうを見れば、外は暗く、しとしとと雨が降り注いでいた。

「雨か。寒いはずだ」

少しだけ身を震わせ、起き上がる。

ちょうどした違和感によくよく自分の姿を見ると、コートからアンダーシャツ、ズボンからブーツに至るまで漆黒に統一された見慣れた格好。……服装は昨夜外に出たときのままだった。

記憶を掘り下げてみると、自分は帰ってくるなりそのままソファに寝潰れた気がする。確かにここ数日は寝る間もない状況が続いたが、かといって着替えもせずに眠りにつくのは珍しいことと言えた。

疲労が溜まっていたのだろうか、と自己分析するがそれはすぐさま違うと結論付けた。このくらいで体力を減らすようではとつくの昔に潰れている。だとすると体力的な問題ではなく精神面……と、そこまで考え至り、ようやく理解出来た気がした。

「どうやらまた意味のない思考に陥っていたみたいだな、俺は」

——自分が生きる意味は何なのか。

こおしばらく——特にここ数ヶ月——何かにつけてそんな詮無いせんないことに思考を傾けてしまっている気がする。結局『考えるだけ無駄だ』と同じ結論に辿り着いて終わるのに、また気付けば同じ思

考を続ける日々。

しかもそんな思考で寝潰れるほど疲労するなどもはや笑い話にもならない。口から出た大きなため息は、自らに対する呆れの現れだろう。

時計を確認すれば、正午を少し過ぎたところ。まだまだ余裕はあった。

肌寒さのおかげで眠気はもうない。備え付けのキッチンへと向かい、コーヒーマシーナに手をかざす。手から溢れた魔力にソーサーの魔導機が反応し、定められた動き、つまりコーヒーマシーナを挽く作業を開始した。水も豆も入っているのだからと出来るのを待つだけだ。

その間にポストに投函された新聞を取りに玄関へと向かった。中を開いてみると、
「ジエーター・ウオーキンス氏、教会の枢機卿に選ばれる、か」

大々的に一面に飾られたのはそれだったが、自分にとっては特に意味のないこと。さっただけ目を通し、本題を探す。

「……」

あった。片隅。見る者の多くが気付かないであろう少ないスペースの中に。

「アデリユードの富豪、レイチェル・アーノルド婦人、何者かによって射殺。現在自警団は必死に捜査を展開中……ね」

どうやらそういうことになったらしい。

しかしこの一件はこのまま有耶無耶に終わることが既に確定している。何故なら、その自警団を

指揮、管理する立場の人間こそ、この暗殺の依頼人だからだ。

そしてその依頼を受けレイチエル・アールド婦人を暗殺した者こそ、クロノであった。

とはいえ、済んだことにクロノはそれ以上の関心を持たない。結果の確認さえすればもはや過去のことだ。

新聞をベッドの上に投げ捨てると、既に挽き終わっていたコーヒーを口に含み、小さく息を吐く。

仕事の完遂は確かめた。となれば、しばらくするべきことはない。精々が今日行われる定期集会への出席くらいだろう。それもまだ時間がある。この余暇をさてどう潰そうか、などと考えていたクロノだったが、それは杞憂に終わることになる。

「ん？」

チリリリン、チリリリン、と無機質な小さい鐘の音が部屋に響く。

それは魔導機を利用した遠距離通信機、通称『導話』のコール音だ。しかし交友関係など皆無であるクロノにとって、この導話に音を与える人物は一人しかありえない。

『俺だ』

受話器を取って耳に響く男の声は、予想通りのものだった。

「……ラディター。こんな時間に何の用だ？ まだ集会には時間があるが——」

『急な依頼だ。君にはすぐに支部へ出頭してもらおう』

急な依頼。その言葉に小さく眉を擡める。

7 第五話 死神と呼ばれた少年

「……わかった。すぐに出る」

『ああ、頼む』

通話が切れるのを待ち、受話器を置いた。

ベッド脇に放られた黒のコートを羽織り、コーヒーを一気に啣あおる。そうして考えるのは、

「急な依頼、ね」

珍しいことだ。が、そう言われれば出向く他ないのが彼と自分の関係だ。無論内容は気になるが、それをいま考える必要はない。

——行けばわかることだしな。

カップをキッチンへ戻し、サイドテーブルに置いてある二丁の愛銃を手に取りホルスターへと挿す。その日常的な一連の動作をこなし、彼は自らの住処をゆつくりと出る。

開けた視界の向こうには、ただ厚い雲が空を覆っていた。

☆ ☆ ☆

家を出て徒歩で十分と少し。入り組んだ建物を縫うように進んだ先に、それはある。

パツと見は、古ぼけた小さな事務所。看板すら無く、一体何をしている場所なのかは見当も付かない。その入り口を彼は躊躇ちゆうちゆう無く開いた。古いドアが擦れて喧やかましい音を立てる。

そこは外見よりさらに狭い空間だった。横長の白いテーブルが三つほどくつつけられてできた急造のデスク。物が乱雑に散らばっており古めかしい魔導コンピュータが一台だけ置かれている。足場には無造作に書類が放られており、一見、既にこの事務所は機能していないようにも見える。

だが最奥のデスクチエア。そこには一人の男が座っていた。

この空間にはおよそ不釣り合いな、一見で金持ちとわかる三〇程の男だ。高価なスーツで身を固め、指や手首には趣味が悪いとしか言いようがない宝石類が散りばめられている。

「来たか、クロノ」

チエアを回しこちらを見るなり、眼鏡の奥の瞳を胡乱げに細めるその男。威圧感など欠片も感じないのに、妙に目を離したくなる奇怪な雰囲気を持ち主。

ラディター・スエールマン。

どんな依頼であろうと殺人において失敗の二文字は無いと称される、真の意味で最強と謳われる暗殺者ギルド『スコープピオン』のギルドマスターである。

そして彼、クロノもまたそこに組する一人の暗殺者だ。つまりクロノにとってこの相手は上司となるわけだが、不遜な態度を崩さぬままデスクへと近付いていく。

「急な依頼、という話だったか？」

「ああ、そうだ」

そんなクロノの態度にラディターは一切触れず、ただ淡々と頷くのみ。彼らにとって言葉遣いや

態度など意味はない。ただクロノは金を、ラディターは結果を求める。それが二人の全てなのだ。

「クロノ、君は今日の新聞を読んだかね？」

「ああ、それが——」

何か関係あるのか、と言葉を紡ぎきる前に、ラディターが一枚の写真を差し出した。

受け取ってみると、映っているのはクロノよりやや年下と思われる少女だった。服装や身に付けているものから、かなりの金持ちだとわかる。

「マリア・ウォーキンス。一五歳。……クロノ、お前にはこの娘の誘拐を命ずる」

「ウォーキンス？ それに、殺害ではなく誘拐だとう？」

ウォーキンス。それはさつき見た新聞に載っていた、新しく教会の枢機卿になったというジエーチャー・ウォーキンスと同じ姓だ。

だがそれよりも気になるのは、『誘拐』という内容だ。クロノがこの組織に入ってから『誘拐』などという命令を受けたことは無い。何故ならここは暗殺者ギルド。クライアントにとつてはあくまで殺人を依頼すべき組織なのだから。しかし最も奇妙なのは、そんな『誘拐』などという依頼をラディターが受けたことだ。

そんな思考を表情から読み取つたらしいラディターは小さく笑つて、

「単純な話だクロノ。それだけこれが上手い話だということだ」

つまりは膨大な大金が動く、ということなのだろう。

このギルドにおいての暗殺請負は、一にも二にも金だ。だがそれでも『絶対に失敗しない暗殺ギルド』というブランドを保つため、決して無茶無謀な依頼は受けない。その辺りがラディターを数年もの間、闇世界に君臨させた要因だ。そして彼には彼なりの、暗殺ギルドの長としての矜持もある。本来であれば暗殺以外の依頼など問答無用で蹴るだろうラディターが、それでもなお受けたと言うのであれば、クロノでは到底考えられぬほどの額の金が動くに違いない。

だが、それはそれで逆に疑問が浮かぶ。

「金が動くのはわかった。依頼人が誰なのかもどうでも良い。……しかし、たかだか枢機卿の娘を誘拐することで、何故それだけの大金が動く？」

確かにこの国、ヴィエラス首長国は宗教色の強い国だし、国教であるイデア教の枢機卿ともなれば、その発言力は国家首長に等しい……いや、下手をすれば勝る可能性もある。その娘ともなれば利用価値はあるだろう。だがそれにしても、ラディターが矜持を曲げてまで依頼を受ける額に見合うとは到底思えない。

だがそれに対する返答はない。ただ笑みを浮かべたままのラディターがそこにいる。その意味するところは、

（知る必要はないだろう、と）

所詮、クロノはギルドの一員。ラディターの配下であり、ただ提示された任務を処理するだけの存在だ。依頼内容の背景など知ったところで何が変わるわけでもない。故に、教える必要もないの

だと、その態度は物語っていた。

そしてその通りだろう、とクロノも思う。だから問いの内容を変えらることにした。

「ターゲットの居場所や行動習性はいつもの通り後で資料を貰うとして……問題は誘拐を終えた後、どこに置いておくつもりだろう？」

「ああ、それは簡単だ。拠点の一つを使う」

暗殺とは、決して即座に行えるものではない。ターゲットのいる場所に向かって殺してはい終了、などとはいかないのだ。特に絶対成功を謳うこのギルドにおいては、ターゲットの調査は入念に行われる。それは要するに、それなりの日数、ターゲットに悟られないよう監視する必要がある。

そして、そんな調査員たちが長期間潜伏するために用意されている隠れ家のことを『拠点』と呼ぶ。それはあらゆる場所、あらゆる名義で買ったり借りたりしているもので、見た目も中身もただの家と代わり映えはしない。いつでも使えるよう、生活インフラも万全となっている。

だが、使いきりだ。暗殺はその文字の如く、誰にも悟られぬまま相手を殺害し、証拠も残さず消えるのみ。即ち、一度使った拠点は証拠隠滅のためにもう二度と使うことはなく、あらゆるルートを用いて破棄される。もちろんそれは相当の消費となるわけだが、

「フツ、気にする必要はない。拠点の一つや二つ使い潰したところで気にならんだだけの金が出る」

と言われれば、クロノとて頷くしかない。

問うべきことは問うた。全ての答えを得たわけではないが、それは構わない。敢えて知りたいこ

とでもないのだから、と。……それを無関心と呼ぶのか。あるいは諦めと呼ぶのか。

どうでも良い。すべきことはただ一つだけなのだ。だからクロノは踵きびすを返した。もはやここに用などない。

「上手くやってくれよ」

背後からの声に返す言葉はなかった。何故ならそれは当然のことなのだ。

そしてその当然が出来なくなった時……自分はこのギルドに殺されるだろう。

☆ ☆ ☆

午後二時。

首都スエッテンベルドの中心部は、常ならば最も人の往来が多い時間帯だ。特にその商店街ともなればなおさらなのだ。今日は雨が降っているためかやや人足が遠のいているようだ。

そんな疎まばらな人並みから少し外れるようにして、クロノは狭い路地に立っていた。

その恰好は自然体だが、行き交う人々はクロノにほとんど気付かない。たまにクロノに目を向ける者もいるが、それは必ず驚きの動作がセットであり、即ち事前にそこに人がいるということを察知出来ていなかったということになる。これはクロノのいる場所が大通りから見えにくい路地だということもあるが、何よりもクロノの気配遮断能力が高いためだ。

気配を殺す。即ち、身体から意識せずに漏れているわずかな魔力の波を意識的に抑えることを指す。いかに人が魔力の繰り方を忘れたとはいえ、魔力そのものがなくなつたわけではなく、大小の差こそあれ、皆平等に持っているものなのだ。漏れるのも無意識なら、それを知覚するのも無意識。人は意識せず『そこに人がいそうだ』と判断し、そこから視線を向けるという動作に繋げるわけだが、その前提がないのだから、偶然クロノを目にした者が驚くのも無理はない。

だが、気配遮断がこうも機能しているのはクロノの実力だけが全てではない。もう一つの要因が、更にその効果を増しているのだ。

クロノは視線を軽く周囲に回し、呟く。

「ここは相変わらず魔導機が多いな」

そう、あらゆる箇所に設置された魔導機を搭載した設備。それらがわずかに放出する使用魔力の放出残滓ざんしが、ただでさえ薄くされたクロノの気配をジャミングのようにかき消しているのだ。

この国は国教としてイデア教を崇拜しているため、魔法……つまりは魔導機の依存度が他国よりも激しい。

例えば鍵を閉める、という動作。ただ鍵穴に鍵を差し回す、というたつたそれだけの動作すら魔導機に取って変わっている。事前に登録された魔力の持ち主が手をかざすだけで扉が開く仕組みだ。

鍵を失くしたり盗賊に解錠される心配がなくて助かる、と人は言う。だがクロノに言わせれば

開け様はいくらでもある。

魔導機の技術者なら登録魔力の変更など造作もないだろうし、あるいは本人及び家族を脅して開けさせることも出来る。極論、腕だけ切り取って魔力の巡りが無くなる前に鍵に翳せば解錠出来る。

便利なものを利用することは何も問題ではない。が、それに依存しすぎてはもしもの時に対処が出来なくなる。

……毛嫌いしているわけではないが、クロノが魔導機を利用しない一つの理由としてそれがあ

る。そんな自分の考えを誰かに語ったことは過去に三度。上司であるラディターと、同僚の二人だ。別段自分から語ったわけではない。仕事の合間に同僚たちが何故魔導機を使わないのか、と聞いてきたから答えただけ。

それを聞いての反応はそれこそ三者三様。

「別に構わん。それで仕事が出来るとならな」

とラディター。そして残りの二人は、

「そういう無駄に自分に厳しいところ、実にあんたらしいと思うよ」

「道具なんて何であれ長短ある。長所を最大限に発揮し、短所をカバーすれば良いだけの話だ」

一人は苦笑交じりに肩を叩いて、もう一人はつまらないような目線で自論を展開した。

だがクロノは彼らの反応から何も思うところがない。そもそも主張したい意見でも通したい意地でもないのだ。気にする必要がなかった。

閑話休題。ともあれ、こうして壁に寄りかかり一つの道、人の往来を見ているだけでそこかしこに魔導機の恩恵は存在した。

人を豊かにする道具。その言葉に嘘はあるまい、事実こうして目の前を歩く不特定多数の人間は皆魔導機の恩恵を数多受けている。

……しかし、幸福というのはい定量しか存在しえないのか。財と同様、魔導機が与える恩恵は結局のところ、この国に住まう人間の半分程度にしか与えられない。

いま背を預けている壁。その傍らにある曲がり角。この狭く暗い路地の先。そこを曲がり真つ直ぐ行つた先に、この光の世界から隔絶された地獄が存在する。

——スラム。俗にそう呼ばれる、法の埒外、本能と狂気だけがある世捨て人たちの巢窟だ。

あるのは動物めいた弱肉強食の摂理。明日の食事どころか、我が身さえ守るのに力は必要だ。そこに誇りはない。慈悲もなければ助けもない。光を歩く者は意図的に目を逸らす、暗い暗い闇の世界。蔓延する死の臭い。そこはスラムと言う墓場。用なき命を廃棄するゴミ捨て場。

こうしているいまもお、強者に搾取される弱者が存在するだろう。今日一日でどれだけの命が消えていくのかわからない。だが、それでもクロノは思うのだ。

懐かしい、と。

クロノがスラムの実情を詳しく知るのも当然。何故なら彼はここで育った人間だからだ。

そのときの生活は、いまでもハッキリと覚えている。否、忘れることなど一生出来ないだろう。何故ならこここそがクロノの始まりなのだから。

「うあ……」

「ん？」

見つめていた路地の先、その曲がり角から、ひよこりと顔を出す子供がいた。薄汚い布としか形容出来ない服を着込んだ、見た目、四、五歳の少年。その少年は身体をフラフラと揺らせながらも、視線を一点に集中させていた。

それはクロノが買ったパンだった。この路地に入る前に商店街の店で昼食用にと買っておいただが、まだ食べていないことをすっかり忘れていた。

視線の理由は問わずとも明確だ。さてどうするべきか、と考える。本来はここでほし施しを与えてもこの少年のためにはならないのだが、下手に暴れられたり泣かれたりなどして目立つのは都合上良くない。

よつて、クロノは取っておいたパンをその少年の横に投げ捨てた。

「やるからとつと行け」

先程までの覇気のない表情が嘘のように、少年の表情が輝く。まるで天使でも見るような瞳からかわすようにクロノは視線を逸らす。

「あり、が、と」

不規則に断ち切られながらも、その言葉は礼の形となった。途切れ途切れなのは、既に声を出せぬほどに体力を消費しているのか、あるいはそもそも言語をちゃんと学んでいないためか。だが、どちらにしろそれは少年の過酷な状況を表していた。

だが、パンを大事そうに抱えて走り去る少年を横目に、クロノは小さく息を吐いて呟く。
「そこで安心してるようじゃ、まだまだだがな……」

スラムにおいて、食べ物を手に入れるまでは第一関門に過ぎない。それを持ってスラムに戻った時はたして周囲の人間に横取りされないかどうか……、それが第二関門なのだ。

あの少年ははたして第二関門を突破できるだろうか？

おそらくは不可能だろう。体力が限界に近そうだった、ということもあるが、何よりこの程度で喜んでしまっている以上まだスラムの生活に慣れていないと見える。狡猾で残忍で強固なスラムの住人があのような鴨を見逃すはずがないのだ。

しかし、それは彼の人生だ。つまり、

「それこそ、俺には関係のない話だな」

「そうなんですか？ お優しい方」

「当たり前だ。俺には——つて」

振り返る。

そこには、清楚なドレスを着込んだ少女がいた。その服装だけならばこの商店街にいてもギリギリおかしくはないが、腰まで靡く艶やかな桃色の髪と、その風体から漂う物腰は明らかに庶民のそれではない。

それになにより、その少女の顔はついさっき写真で見ただけのものであり、つまりは……。

(マリア・ウォーキンス……！)

ここにいること自体は不思議ではない。そもそもクロノがこんなところまで来たのは、この時間に高確率でマリアがこの商店街に立ち寄ると知っていたからだ。

しかし、それでもクロノは驚きを隠せなかった。気配を殺していた自分に気付いたこともそうだが、暗殺者たる自分にこの距離まで気付かれずに近付いてきたことが何より脅威だった。

とはいえ、この少女が自分のように気配遮断に長けている……などというのではない。現にこうして目の前にいるいま、気配はハッキリと認識できている。

では何故か？ 理由は簡単だ。

この人間は警戒心というものを持っていない。

気配に気付けなかったのは、気配……つまり滲み出る魔力が小さい(魔力総量が少ないのか、あるいは逆に魔力の循環効率が高いのか、どういった理由でかは知らないがここでは気にする点ではない)のと、クロノの意識が別の方向に向いていたせいだ。

だが、それでも他者が自分を認識した時点で起きる気配の脈動みぎどうちうで普段なら気付いたはずだ。

普通、よほど気心の知れた相手か、逆にただすれ違うだけの風景のような人間相手でもない限り、他人を見つければ何らかの心理的アクションがあるはずだ。

興味でも警戒でも良い。他者を一人の個として認識したとき、人の心は動き、合わせて身体や気配もわずかな動きを見せる。そういった変化、つまり『他者が自分を認識した感覚』を見逃すことなど本来ならありえない。

何故ならスラムでは他者を認識することは即ち生存競争の開始と同義なのだ。先手必勝を狙うにしろ速やかに逃げ出すにしろ、生き残るためにはそれを素早く察知する必要がある、逆を言えばスラムで長い年月を生き抜いたクロノはその技能を当然備えている。

にも関わらず、気付けなかった。それはつまり、この少女はクロノに対しそういった心の変化を生み出さなかったということ。まるで旧来の友人に会ったかのような警戒心の欠片もない無垢な視線は、むしろクロノに恐怖を抱かせた。

一体どうやって育つたら、こんなにも他者を警戒せずいられるのか。

警戒なんて言葉も生温い環境で生きてきたクロノと比べるべくもないが、一般社会に住んでいるだけでも人間同士の摩擦まさつはある。特に嫌な思いをすることの方が多いはずだ。そんな経験を一度でもすれば子供だつて他人を警戒するだろう。それが無い、というのとはや異常と言える。

そんなクロノの驚きをよそに、マリアは小さく微笑むと、先程去つて行った少年の背を追うようにしてスラムに目をやった。

「あの子はきつとあなたのおかげで救われたでしょう。それはとても素晴らしいことだと思います」
「……こいつは何を言っている？」

クロノは吐き捨てるように言う。

「素晴らしいことでもなんでもない。俺はただここから追い払つたにすぎない」

「つまり、自己中心的な考えからの行動だ……と？」

「そうだ」

「そうですか。あなたが言うのなら、そういうことなのでしょう。でも、その結果彼は助かったのです。その結果は変わりません」

上辺だけの綺麗事……ではない。誰も彼もが生きるために平気で嘘をつき、騙し、陥れようと
する闇の世界で生きてきたクロノだからこそ、わかる。

この少女の言葉に嘘や偽りなどが無いことを。
ちつ、と舌打ちする。クロノは苛立つたように頭を掻きながら、少女を見据えるためわずかに視
点をずらした。

「良いか？ スラムっていうのは、野獣の住み合うジャングルに近い。食べ物を手に入れたから助かる
という場所じゃない。手に入れた食べ物を今度は他の奴らから守りきらなくちゃいけない。そのた
めには争いだつて起きる。死人だつて当然出る。それがあそここの日常であり、法則だ。誰も助けない
し、誰も悲しまない。スラムはそういう場所だ」

光の世界に住む人間は知らない事実。知ろうともしない現実。

とはいえマリアの無知を責めるのは酷ではある。何故なら政府によって意図的に情報操作がされており、スラムの現状は知ろうと思つて探りでもしない限り、わかりはしないのだから。

知らない悲劇に誰が顔を向けるだろう？ 見なくて良いと言われた醜い世界を敢えて見ようとする物好きがどれだけいるものか。

仮にいたとしても、予想を大きく上回る劣悪な世界を直視して、なお見続けようとする者などそうそういやしない。

「下手な施しは不幸を招く結果になる」

だからクロノは叩きつけるように事実を告げた。

それを聞いたマリアは少し驚いた後、しゅんと顔を俯かせ、震えを抑えるかのように自らの身体を抱きしめた。知らされた現実には打ちのめされたのかと思つたが……それは違った。

「そう……だったのですか。スラムという場所が、まさかそこまでの場所だとは私、知りませんでした……。ということは、きつと私がいままでここで食べ物やアクセサリを与えてきた子たちも、そんな争いに巻き込まれてしまったのですね……」

その言葉に、衝撃を受けた。

「待て。お前、……この奴らに食べ物を与えていたりしたのか？」

「え、あ、はい。そうとは知らずに……ですけど」

それは後悔。そう、このマリアという少女は悔いているのだ。助けになると信じて行った行為が、その実彼らをより苦しめる結果になってしまったかもしれないことを、それこそ心の底から。誰も見向きもしない、スラムの人間に対して……。

「……なんでだ」

「はい？」

「なんで、そんなことをする？ スラムに居るのは不必要と捨てられ、この世に生まれた意味すらないと言われる連中だ。表の連中は誰しもが見向きもしないこの空間で……お前みたいな金持ちがなぜ、そんなことをする？」

思わず漏れた言葉だった。無意識に放たれた問いは、だからこそ本心でもあった。

クロノはにとつて、表から見た見たスラムという裏の世界は、まさしく『臭い物に蓋』だ。だが仕方ないとも思っている。

上がいれば下がいる。どれだけ平等を謳おうとも、一つの種族が群となって生きる以上、どうしたつて避けられない現実だ。国々での差は、それが多いか少ないか、そして見えやすいのか見えにくいのか。その程度でしかない。

そして更に共通することは、上にいる多くの人間は下の人間を同じとは思わないということだ。下等、劣等、敗者、負け組……。表の世界に住む場所を失った弱者だと、多くの者は嗤うのだ。

だがマリアの行動はそんな連中と大きく異なるものだった。故に問う。何故、と。

そんなクロノの台詞にマリアは一瞬キョトンと、しかしすぐに笑みを浮かべ、
「でも、同じ命じゃないですか」

ただその一言で片付けた。

」

あまりのことに思わず言葉が出てこない。

罵倒したいのか。呆れたいのか。それとも……。

「……くそ」

よくわからない。そうして表情を歪めるクロノを見て、マリアはふと首を傾げた。

「どうしました？」

答えない。答える必要もないだろうと無視を決め込んだ。

するとなにを勘違いしたのか、マリアは得心がいったように手を打ち、

「そっか、まだ自己紹介がまだでしたね。私は——」

「マリア・ウォーキンス。今度教会の最高責任者に就くことが決まったジエーチャー・ウォーキンス卿の

一人娘。よろう？」

上乘せするように放った言葉に、マリアがまあ、と間の抜けた言葉で驚く。

「よくぞ存知ですね」

「当たり前だ。これからさらう相手なんだからな」

「……はい？」

小首を傾げるマリアに、クロノは腰のホルスターから銃を取り出し、その銃口を向けた。

「あんたを誘拐するように命じられた者だ。大人しく捕まってもらおう。反抗さえしなければ命は取らない」

命は取らない。自分で言うておきながら、そのフリーズが妙に引かかった。

いままでは問答無用で撃ち殺してきた自分の台詞とはとても思えず、表情には出さないものの内心失笑していた。

で、当のマリアはよく状況が飲み込めていないのか、ただキョトンと銃口を見つめている。

「……えっと、さらう、とは私のことでしょうか？」

「お前以外にここに誰がいる？」

「ですね。でも、……なぜ？」

「俺は知らされてない。単なる実行員だからな。だが、お前の父親絡みなのは間違いないだろう」

「そうですね……」

さすがにショックはでかかったか……と思ったのだが、再び顔を上げたマリアは真面目な顔で今度は妙な事を口にしてきた。

「あの、私をさらわないとあなたは困るのですか？」

「……………は？」

「いえ、ですから困ります?」

何を言いだすのかこいつは。呆気に取られつつ、クロノは辟易しながら答える。

「そりゃ、困る。これが俺の仕事で、食い扶持だからな」

「そうですか。わかりました」

にこやかに返事し、マリアは両手を上げた。

「反抗はしません。どうぞ、好きなように」

「……そうか」

まさかあつさりと受け入れるとは思ひもしなかった。さっきからこちらの予想もしない動きをされてどうにもペースが狂ってしまうが……まあ、楽に行くに越したことはない、と思うことにした。

これで自分の仕事も終わり。なら良いさ、と心中でこぼしながらクロノは銃をしまったのだった。

☆ ☆ ☆

「はあ? 俺にこいつの監視をしていろと?」

マリアを捕獲した、とラディターに携帯で伝えた途端返ってきた言葉がまさにそれだった。

現在クロノは左手で携帯を持ちつつ右手で車を運転しているが、あまりに想定外の言葉に思わずハンドル操作を失敗するところだった。

クロノは優秀な暗殺者だ。それは客観的な事実である。暗殺ギルド『スコープオン』内部においてもその能力は五指に入ると言われている。そして汚れた世界はこのギルドに日々多くの暗殺依頼を持ち込んでおり、ともすれば優秀な手駒を遊ばせておく余裕などないはずなのだ。にも関わらず、監視などという命令。

数時間前にも思ったが、この一件……一体どれほどの額が動いているのだろうか。

『捕獲した後の事は特に依頼を受けていない。とはいえ今後どうなるかわからんからな。例の隠れ家に幽閉した後、お前もそこで監視を続ける。その間その少女は好きにしてかまわん。ただし絶対に逃がすなよ?』

言うだけ言って通話が切られた。無情な電子音を流す携帯を睨み付けるが、もちろんそれどころか好転するわけでもない。

「どうしたんですか?」

助手席に座って律儀りちぎにシートベルトまでしているマリアが小首を傾げて声をかけてくる。その顔をクロノはただ半目で眺めた。

「……? あの、私の顔になにか?」

「いや」

ただ、どうしてさらわれたというのにこの少女は平気な顔をして助手席に座っているのか、と意味のないことを考えただけだ。

嘆息一つ。

「……なんでもない。あなたには関係ないことだ」

「むっ。そういう言われ方は少し傷付きます」

「はいはい、そうかよ」

なおも頬を膨らませるマリアを無視して、クロノはもう何も考えまい、と思考を放棄して運転に集中した。

彼が向かうのは事前にマリアを幽閉することになっていたギルドの隠れ家の一つ。地上三階建てのごくごく平凡なマンションだ。

「着いたぞ」

「え、ここですか？ 誘拐ということでしたから、もつと山奥とかのそれらしい秘密基地っぽいところに連れて行かれるものかと思ってきましたけど」

「そいつは愉快な想像だな。逆にそんないかにもな建物があるのなら見てみたいものだ」

まあそんなあからさまな建物があれば即座に軍が踏み込んで解体しているだろうが。

備え付けの駐車場に車を置き、車を降りて助手席側へまわる。そして扉を開く。降りるのに手間取っているマリアの手を取って降ろさせ――、

「――つて、これじゃまんま抱え運転手じゃないか」

「はいっ」

「なんでもない。単なる自己嫌悪だ」

なおも追求しようとするマリアを無視する意味でもその手を引つ張りマンションのエレベーターに乗り込む。

ボタンには『1』から『3』までしかないが、クロノは非常用の通話ボタンを三回押し、そして三階のボタンを数秒間押しっぱなしにした。

するとエレベーターが動き出す。……下へ。

「まあ」

また間の抜けた驚きの声がマリアからあがる。それを横に聞きながら、クロノは腕を組んで壁に寄り掛かった。

およそ十五秒ほどでエレベーターが止まり、扉が開く。

降りてクロノはただ歩いた。マリアを先導することはしない。もうここまで来てしまえば一人で逃げることも出来ないのだから、そこまでする必要もないだろう。

案の定マリアは逃げようとせず、むしろ慌てたようにこちらの背を追って小走りで駆けてくる。

「なかなか広いですね」

「地上側は一フロアに四世帯入るが、ここは地下一フロアまるまるこの部屋だからな。とはいえ、お前が元々いた屋敷に比べればたかが知れているだろう」

「それはそうかもしれませんが……でも、置物がないですから」

ああなるほど、とクロノは心中で納得した。

確かにここは隠れ家という用途上、生活臭はない。一応最低限の設備はあるが、それはやはり最低限なのだ。あらゆる場所に絵画や壺など装飾品が置かれている資産家の屋敷に比べれば、確かに空間的な広さは感じられるのかもしれない。

などと考えつつ、部屋中央に置いてあるソファにドツと座り込んだ。しばらく使っていなかったようので埃が舞ったので、軽く払うように手を振りながら、

「ともかく、ここであなたを幽閉する。とはいえ台所もベッドも風呂だつてついている。……金持ちのあなたからすればこれでも不十分なんだろうが、我慢しろ。そのかわりこの中でなら好きに動いてくれて構わない」

すると、マリアは嬉しそうにはにかむと両手を叩き、

「では、お掃除をしても良いですか？」

「……………はあ？」

「えーと……。掃除機……は見当たりませんね。なら、箒ほうきや雑巾はありますか？」

キヨロキヨロと周囲に視線を向けているマリアに、クロノは待て、と告げ、

「どうしていきなり掃除になる？」

「え、だつてしばらくはここに住むことになりますから、綺麗な方が良くないあ、と。ここ、随分と長い間使っていないようで埃ほりが積もってますし」

相変わらず視線は掃除道具を探しながら、返答がきた。まるでそれが当たり前だと言わんばかりのノリだ。

「……確か洗面所の方に一応の掃除道具が入ったロッカーがあつたはずだ」

「あ、ありがとうございます」

笑顔を向け、そのままてて、と洗面所へと向かつていくマリア。クロノはもう突つ込む気力も失せていた。

なんとなくマリアという少女の性格がわかつてきた気がする。つまり……いちいち驚いていたら疲労が増すだけだ、ということだ。

「掃除機もありましたー。これで少しは楽にお掃除ができますね」

洗面所の方から戻ってきたマリアはさも嬉しそうに胸元で掃除機を掲げて見せる。

そうかよ、とだけ言つてクロノはそっぽを向いた。そんなクロノに構わず、マリアは魔力を流し込み掃除機を起動、鼻歌交じりに掃除を開始する。

緊張感の欠片もない。

どうしてこうなった、とクロノは現実逃避気味に意識を睡眠へと落としていった。

……この時、クロノは気付いていなかった。

自分が何の警戒もなく、他者がいる空間で眠りについたらということ——。

☆
☆
☆

何をやっているんだろう、自分は。

紙袋に詰まったパンやら野菜やらをクロノは眺めながら、それはもう大きなため息を吐いた。

ポーン、とエレベーターが目的地に着いた音が響く。開いた扉の向こうへ歩き出し、そうして人質を幽閉している部屋へ踏み入れれば……。

「あ、お帰りなさい。待ってたんですよ〜!」

台所からひよっこ顔だけ（もちろん底抜けの笑顔）を見せたマリアに出迎えられた。

「それで、どうでした?」

「……ほらよ!」

答えるのも億劫おっくうになり、クロノは買ってきたものを纏めて放り投げる。

おっとと、などと一言いつつも器用にキャッチして見せたマリアはすぐさま買い物袋の中身を確認し、うんうんと二度頷いた。

「牛乳とパンと……あ、これ良いお肉ですね! 野菜もとっても新鮮そうですね、うん、これなら美味しいシチューが作れそうですね。ありがとうございます!」

何で俺が買い物なんか、とも思うが、マリアを人質として幽閉している以上外に出られるのは自分しかないのでは仕方ない。

いや、それでも普段の自分であれば言われた材料を買いに行くなんてお使い染みた（いやもうそのものだが）ことしないだろうが、このマリアという少女が掃除洗濯炊事といった家事をフルに發揮し動き回っているため、自分だけソファーで寝っ転がっているのもそれはそれでどうなんだ、といういたたまれなさによるところが大きかった。

既に幽閉を開始して三日。

マリア・ウォーキンスは初日のまま……いやむしろそれ以上に吞気に人質生活を満喫している。どこの世界にエプロンして鼻歌交じりに料理を作る人質がいるだろうか？ いやいるわけがない。

最初こそ強がつている演技かとも多少思ったが、もはや疑う余地はないだろう。この少女は本当に楽しそうにここで生活をしている。

それが彼女の性格だから？

それもあるだろう。……だが、決してそれだけではないような気もした。

「……あんた」

「はい？」

調理の音が邪魔をして声があまり届かないようだ。それでも何かを言ったのだけは理解したのか、マリアは腕を動かしつつも目をこちらに向けてくる。

そのあまりに真つ直ぐな瞳に一瞬躊躇ちゆうちゆうしながらも、クロノは口を開く。

「どうしてそういうこと楽しそうに出来るんだ？ 金持ちのお嬢さんだろ？ そういうのは普通メ

イドや執事がするもんじじゃないのか」

聞こえるようにやや声を張る。するとマリアは目を細めて、

「そうなんですけどね。……でも私家事全般好きなんです。だからいつもメイドや執事の皆さんから文句を言われています」

薄く笑う。そのまま視線を台所に戻して、しかし口は動く。

「私は、なんでも自分でしたいんですよ。いまでは料理も、掃除も、裁縫も好きな事ですけど……。でも、最初は父に対する反抗心からでした」

「反抗心？」

マリアが頷く。そうして見せた表情は、これまで見たことのない、力の抜けた弱い笑みで、

「私は、父と……スラム育ちの母から生まれました」
「なっ……」

データにはなかった情報に思わず目が見開く。

だが、そんなクロノに気付く様子もなく、マリアの独白は続く。

「母は父の奴隷当然の存在でした。そうして……いろいろな過程の中で、『不必要』なはずの私が生まれてしまった。でも、教会に仕える者が、汚らしいと言われるスラムの女性との間に子供を儲けたとなれば、父の立つ瀬はなくなります。……母は殺されました。きつと、あなたのような暗殺者によつて」

「……」

「そして私は母の子供としてではなく、孤児院から引き取った子供として公表されました。……当時は南で起きた三国戦争終結直後ということもあって経済が悪化していましたから、子供を預かる事など容易に出来ることではない、と人々もその話を美化して受け入れました。教会に仕える父にとつて最高のプロパガンダになったでしょう」

確かに受け取ったデータにもマリアは孤児院出身者である、とされていた。だが母親がスラム出身であるのなら戸籍などあるはずもなく、事実確認など出来やしないだろう。

だがここで、一つ疑問が出てくる。

「お前の話し振りからすると、それは事実じゃない、ということか？ 三国戦争終結直後ってことは約十年前。当時はまだ重役に就いていなかったあんたの父親からすれば、確かに子供を一人育てるのは大変なものじゃないか？」

現在は枢機卿、そうでなくても数年前から相当の重役に立っていたジェーチャーはいままでこそ裕福であるが、十年前となればまだそうでもなかったはずだ。

だがマリアは首を横に振る。

「既に当時から父は多額の富を持っていましたよ。何故なら父は……神格保有者ですから」

「！」

神格、というのはイデア教が何かしらの基準を持って与える位のことだ。その基準は公にされて

おらず諸説あるが、確実に言えることとしては教会でも相当の発言力と莫大な資金が手に入る。また噂では神格保有者は総じて魔力総量が多いとも聞くが、どこまで本当なのかはわからない。

だが、これで納得は出来た。神格保有者であるのなら、金に困ることはないだろう。子供一人育てることなど容易に違いない。だが先程のクロノのように、それと気付かない者たちからすれば、輝かしい美談になったことだろう。

「そうして私は育てられました。なんでも手に入りましたし、なんでも貰えました。どんなわがままも、大抵の事は通りました」

けれどそれだけでした、と彼女は言う。

「社交界など以外では、私は父と話すことなどほとんどありませんでした。あの人は、お金さえあれば私を手懐けられると考えていたのでしよう」

その瞳が、クロノの知る限り初めて悲しみに染まった。

「だからこそ、私は反抗心のようなものを抱いて、なんでもやろうとしました。あなたがいなくても一人でやっていけると子供心にそんなことを考えて……。でも、たとえ家事が一人で出来たところで何が変わるわけでもなかったんです。そんなの、当然ですよね？」

些細な反抗は、しかし何の解決にもなりはしない。

おそらくいろいろなと試したのだろう。だが所詮、子供の出来ることなどたかが知れている。どれだけ必死にもがこうと、籠の中の鳥は外に出ることは出来ず、飼い主には何やら暴れているな、

と笑われて終わってしまった。

「結局私は父のプロバガンダとして生きていく以外に道はなかった。そして私はそれを受け入れた。でも、それはただの逃げなんですよね。……だから、その贖罪とがなかもしれません。私は時々ああしてスラムの近くを通つて、その子供たちに食べ物や物やお金を与えていたんです」

——金持ちが、どうしてスラムの子供なんかに。

あの答えが、いま見えた。

確かに彼女は資産家の少女だ。……だがマリアはスラムの住人の過酷さを知っている。あそこ生まれだというだけで、全てが否定されることを知っているのだ。

そしてそれを知つてなお、自分が生きるためにそれを胸に仕舞い込んで、これまでを生きてきたのだから。

だからスラムの者たちに施しほどこを与えていた。……許しを請うこように、あるいは母のような人を救いたいと願いながら、ひっそりと。

スラムを見るあの目は……きつとある種の悲しさに満ちていた。

「だから、きつと私をさらつても意味はないんですよ。父はずつと求めていた教会の枢機卿という地位を手に入れた。私のような存在のために、その地位を手放すはずがありません。きつと、それによつて私が死んでも、それを悲話として大衆に広めるでしょう」

あの人にとつて私はただのプロバガンダですから、と彼女は笑った。

誘拐されても、幽閉されても、一切抵抗しなかった理由をクロノはようやく理解した。

諦めているのだ、彼女は。自分に降り掛かる何もかもを、仕方ないことだと諦めている。誘拐されたところで助けが来ることもなく、逃げ出すこともなく、おそらく、その末に殺される可能性があることも含めて……。

「はい、これで完成です。あとは盛り付けるだけで終わりですから、もう少し待ってくださいね」
何事もなかったかのような笑み。そうやって笑い続けるのは、彼女なりの自己防衛なのか。

どうせ何も変わらないのなら、せめて笑って過したと。

しかし、そうしてにこやかに笑っている姿は……知つてから見れば、逆に痛々しいものだった。
「では、食事にしましょうか。えーと……、あ」

ポンと、手を叩きマリアがこちらを見る。

「そういえば、お名前聞くのすっかり忘れていました。よろしければお聞かせ願いませんか？」
クロノは首を横に振った。

「あ……やっぱり暗殺者さんですし、お名前は明かせませんか？」

「いや、そうじゃない。名前がないだけだ」

「え？」

「俺は——」

口を開き……しゅんじゅん逡巡する。

相手はただ、仕事で誘拐して来た少女だ。それ以上でもそれ以下でもない。にもかかわらず、いま自分は何を言いかけているのか。それは不必要なことではないのか……。そんな風に、頭の片隅でもう一人の冷静な自分が問いかけてくる。

そうだ。全てその通りだ。けれど……。けれど、自分はこの少女に他の人物とは違う何かを抱いている？

同情？ 違う。その程度なら、自分の方がよっぽど辛い過去を送ってきた。

なら……。それは、きつと、そう。

「俺もスラム育ちなんだ」

——ちよつとした、仲間意識なのだろう。

「……え？」

驚き目を見張るマリアに、クロノは静かに語りだす。

「俺もお前の母親と同じでスラムで育った『不必要』な子だった。だから名前だつてない」

一番古い記憶は、スラムの片隅で毛布にくるまっていた自分だ。

親の記憶など一切ない。それどころか自分の名前さえ知らなかった。手掛かりも残されておらず、手元にあったのは子供が持つには似合わない二丁の拳銃のみ。

それが自殺しろという意味なのか、あるいはこれを持って戦つて生きろという意味なのか、それは知らない。だがクロノにとって唯一それが親との繋がりと言えた。

何も知らず、わからない。自分の存在に意味はなく、死んでも誰にも気付かれない。だから生きる意味もなかった。だが、だからと言って死にたくはなかった。殺されてたまるか、とも思った。それは生を受けた者の生存本能というやつだったのかもしれない。

「この前も言ったが、スラムには秩序なんでもない。弱肉強食の世界だ。子供だろうが老人だろうが女だろうが殺すし殺される。生き残るためには何でもアリの世界。騙し騙され、盗み盗まれ、殺し殺され……生きるためには相手を出し抜き、強くあるしかない。そんなシンプルで残酷な世界だ。そういう意味では、奴隷扱いとはいえ表の世界に來られたお前の母親は運が良かったのかもしれない。まあ当人はそれを幸せだなどと思わなかっただろうけどな」

「……」

「生きる意味も目的もわからないまま、それでも俺はスラムで生きた。生き延びた。そのためには盗みもしたし殺しもした。時には前の日に隣で寝ていた同い年くらいの子供が手に入れた食料を横取りするために殺したことだってある」

「いまでも覚えている。寒い夜。一人の体温じゃ毛布ではきつく、そのときは身を寄せ合った名も知らぬ女の子。互いに身を寄せ合い、明日も頑張つて生きよう、と言われたことを。」

「……殺しは慣れてからは簡単だった。躊躇ためらいなく引き金も引けた。それがたとえ誰であろうとも、だ。それに俺は、生まれつき人より殺しに便利な力を持っていた」

クロノは自らの瞳に臉の上からそつと触れる。この瞳に宿る力が、彼をスラムで生き長らえさせ、そして現在ギルド内でも有数の暗殺者たらしめるものなのだ。

「そんなこともあつて、スラムでの生活は案外楽だった。殺せば金も食へ物も手に入った。特に苦勞もしなかった。そんな生活をしばらく続けていると、どこかで噂を嗅ぎ付けたんだろう。いまの暗殺者ギルドの頭が俺の前に現れた」

まだ十歳にもなっていない自分が、その男……ラディターは告げたのだ。
来い、と。人を殺してもつと裕福に生きていける場所を与えようと。

「……迷いはなかった。結局、することなんて変わらないからな。俺はそいつに従つて……ここまで生き延びてきたんだ。のうのと、な」

「そんな……そんなのつて……」

さすがにこちらの方が怖くなったか、と思つたが……それはとんだ勘違いだった。

マリアは真つ直ぐにクロノを見つめていた。その揺れる瞳に恐怖や怯えといった感情は欠片もない。浮かぶ色はただ一つ。それは……

「悲しいじゃないですか……!」

何ということか。この少女は、クロノの過去を聞いて我が事のように悲しんでいるのだ。

「……なんでお前が泣きそうな顔をしている? そつちだつてかなり辛い過去を送つてるだろう? どつちもどつちさ。お前が自分の過去を辛いと思つていないように……いや、思わないようにしてい

るように、俺も同じだったことだ。だからお前が……」

見る。その少女の……瞳から零れ落ちるその雫を。

「お前が泣くな」

だが、マリアは首を振った。ポロポロと落ちる涙を止めようともせず、

「……あなたが、辛いと思わないのなら、私が辛いと思います。あなたの分だけ、私が泣きます。泣かせてください。だって、だってそんなの……あまりにも……!」

泣きじゃくり、マリアは床に座り込んだ。涙を抑えようともせず、両手で顔を覆い、むせび泣く。そんなマリアを見て、クロノはなにか、自分でもよくわからない感情が自分の中に浮かぶことを自覚した。

いままで、自分のために泣いてくれた人はいただろうか？

クロノにとつて他人とは、自分を兵器として見る者と、敵として見る者と、恐怖の対象として見る者しかいなかった。

なんだろう、この悲しいような……それでいて優しくなれるような感情は。

クロノはゆつくりとソファから立ち上がり、泣きじゃくるマリアの横に膝を下ろし、その肩に手を添える。

「泣くな」

「でも、でも、あなたは——」

「クロノだ」

「……えっ？」

「一応の俺の名前だ。俺の仲間からはそう呼ばれている。だからお前も呼びたければそう呼べ」

「……クロノ……さん？」

「それより顔を洗って来い。お前、ひどい顔してるぞ。そして食事にしよう」

ぐしぐしと涙を拭ったマリアはコクンと頷くと無言で洗面所に向かった。

そんな彼女の背中を見送って、

「……不思議な女だな、あいつは」

クロノはもうここ最近何度目かもわからない溜息を吐いた。

☆ ☆ ☆

それから更に二日。

状況は何も変わらぬまま時間だけが過ぎていく。このぬるま湯のような日々は一体いつまで続くのだろうか？ クロノはスープを口に運びながらそんなことを考えていた。

一日に一度、定時報告としてラディターに連絡はしているが、返ってくるのは現状維持の四文字だけだ。クライアントがどの誰だかは知らないが、どうやら思惑通りには行っていないのだろう。

とはいえそれも数日前のマリアの言葉を聞く限り納得出来る展開だが。

おそらく、クライアントの目論見は失敗するだろう。マリアから聞いたジェーチャーの人となりを考えれば、本人が言うように彼女をさらったところで動じることなどないだろうから。

問題はそうなったとき、果たしてクライアントがどのような行動に出るか。最悪の場合は……。

「……馬鹿馬鹿しい」

そんなことを考えて一体何になるといえるのか。自分は所詮命令を遂行するだけの暗殺者。わざわざさらった人間の先なんて気にする意味はない。

「クロノさん、お口に合いませんでしたか？」

正面、小首を傾げるマリアに何と言おうか一瞬悩み……その『悩む』という行為自体が馬鹿らしくなって、クロノは事実をそのまま告げた。

「いや、ちよつと考え事をしていただけだ」

「そうですね。お味はどうですか？」

「……………不味くはない」

美味い。が、どうしてかそう素直に言う気になれず、我ながら天邪鬼な言い回しだと辟易する。ただ、そんなクロノの態度の奥底を感じているのかどうなのか、

「そうですね。良かったです」

マリアは嬉しそうに微笑んだ。まるで最上の褒め言葉を受けたと言わんばかりの笑みだ。

その見破られた感が妙に癩しよくに障り、普段なら決して言わないようなことを口にしてしまう。「別に褒めたわけでもないのに随分嬉しそっだな」

何も喋らなければここで会話は終わっていた。他者と必要以上のコミュニケーションを取ろうとしないいつものクロノならそうしただろう。けれどこれは続きを促す投げ方だ。

しかしそんな些細な変化にクロノ自身気付かず、また投げかけられたマリアも気にしない。

「料理は割と作るんですけど、誰かに食べてもらったことがあまりなくて。その少ない経験も、結局うちに雇われた人たちですから。美味しいと言ってもらえても、素直に喜べないですよね」

誰であれ、雇い主の娘が振る舞った料理を不味いなどとは言うまい。それは当然の気遣いと言えらるのだろうが、マリアにとっちはいらぬ配慮だった。

「だから、嬉しいんです。だってクロノさん、不味かったら不味いつて言ってくれる人ですから」

そんなことさえ、言ってくれる人が周りにはいなかったということ。

誰も彼もが腫物はれものを扱うように接する環境で育ったマリアにとって、何の隔へだたりもない自分という存在は貴重なものなのだろう。

マリアは肩に掛けている防寒用のショールを抱くように引き寄せ、

「皆、私を見ていません。私という飾りを通して、別の何かを見てるんです。だから私が私である必要な欠片もなくて……だから、私がここに本当に居るのか、って……そう思ってしまうんです」

「適当にその辺の店にでも並べば良い。そうすればお前の後ろにまた誰かが並ぶだろう。それはそこ

「お前がいることの証だ」

「……なるほど。クロノさんは意地悪なですね」

眉尻を下げた笑みで言われた。クロノ自身もそうだろうな、と思う。

わかつてはいるのだ。この少女が言っている『存在』というものが、クロノの言っているような意味ではないと。

彼女が言う『存在』とは、ただそこにあるというものではなく、確固とした世界との繋がり。そこにある、だけではない。そこになければならない、という明確な存在理由なのだろう。

彼女の父親は、マリアという存在を利用はしているが、絶対ではない。いなければいけない、いなくてもそのものを利用して終わりだ。

そして彼女の屋敷にいる使用人たちもまた、彼女の父親であるジェーチャーのために動いている。故に、彼女がいることそのものに価値などない。

「……それを欲しい、と思うのは私の我儘なのでしょね」

答えはしなかった。否、答えるだけの言葉を持ち合せていなかった、という方が正しい。

自分がいる絶対の価値など、クロノ自身ないのだから仕方ない。確かに凄腕の暗殺者としての利用価値はあるだろう。だがそれがクロノでなければならぬ理由はない。クロノと同等の実力を持つ者がいれば代用出来るものだし、そもそもより強い者が現れれば必要さえなくなるだろう。その程度の存在でしかない。

加えていえば、クロノはそういった存在を消す立場にある。二重の意味で、クロノはマリアの言葉に答えることは出来なかった。

それをきくと察したのだろう。マリアは両手を小さく振ると、頭を下げてきた。

「すいません。勝手につらつらと変なことを。そんなこと言われたって困ってしまいますよね。……もつと、人質らしくしないとけませんね」

「その納得の仕方も大分変なことだと思いがな。それに、俺はお前に黙れなどとは言っていない。だからお前が何を喋ろうとそれは勝手だ。答えを返せないのは悪いがな」

するとマリアはわずかに瞠目し、しかしすぐに笑みを象るとふるふる首を振った。

「こんな話に付き合っていただけで嬉しいです。私は、果報者の人質ですね」

「さらわれた時点で果報者ではないだろう」

「良いんですよ。私がそう思っているのですから」

「……そうかよ」

見れば、マリアの表情はいつものニコニコ顔だった。

そしてふと自分の心境の変化に気付く。あれだけ鬱陶しいと思っていたのに、この笑顔がまた戻ったことにどういうわけか安堵を覚えている自分がいた。

「……？ どうしたんですか？ そんな突然鳩が豆鉄砲を喰らったような顔で」

「……何でも無い気にするな。こちそうさま」

「あ、お粗末様です」

「……美味しかったよ」

「え……？ いま、あの、何と？」

「……二度は言わん。もう随分な時間なんだ。片付けは俺がやっておくからお前はとつと寝ろ」
「きゃっ」

誤魔化すように掛け布団を放り投げる。咄嗟の反応など出来ようはずもないマリアは顔面からその布団を受け止めると小さく声を漏らした。

布団をずらし、顔だけを見せたマリアの表情は、しかしどこか楽しげだった。

「布団を投げられてしまいました。えへへ」

「気持ち悪い笑いはやめろ。それとも強引な手段で寝かせてやろうか？」

「その強引な手段というのがいかなるものか少し気になりますけど、でもクロノさんのお手を煩わづらわせるのも迷惑でしょうし、ええ、素直に寝かせていただきます」

空いた食器をキッチンへ運ぶと、そのままの足でソファへ向かい、ごろん、と寝転がって鼻の辺りまで一気に毛布を掛ける。ちよこんとはみ出した目をどこか眩しげに細めながら、マリアは小さく、しかし通る声で告げた。

「おやすみなさいです、クロノさん。また明日」

まるで旧来の友達に語りかけるような物言いである。馴れ馴れしい。だがそれを何故か嫌だと

感じていない自分がいて、しかしそんな心境を否定するように頭を振り、

「良いから寝ろ」

「はい」

どこか弾んだ楽しげな返事を聞き流し、クロノは洗い物をするためにキッチンへと移動する。こんな生活があとどれくらい続くのだろうか、とそんなことを漠然と考えながら。

☆ ☆ ☆

おそらく近いうちに動きがあるだろう、と思っていたクロノだったが、予想に反してこの生活はそれから更に二週間もの間続いた。

ラディターに連絡を入れても毎度『現状維持』の一言で片付けられ、クロノは不本意ながら奇妙な同棲生活を継続せざるを得なくなった。

逆にマリアは自分を縛るものがないという環境故か、明るく意気揚々と家事をこなし生かしている。クロノに対してもめげずに何度も話を掛け、一蹴してもどこか楽しそうで、受け答えをしようものなら目を輝かせる始末だ。

家にいる頃より饒舌じょうぜつになってますね、とは本人談だが、それに付き合わされる身にもなつてほしい、とクロノは切実に思う。

とはいえ人間は慣れる生き物だ。それが二週間も続けば望むと望まざるとに関わらず、相手の理解も進む。マリアは好奇心旺盛ではあるが、若干世間知らずなところを除けば理知的であるし勘も良い。あれこれと聞いてはくるものの、どうしてもこちらが踏み込んで欲しくないと思う部分は察してか絶対に近寄らないようにしていた。

あるいはマリアもまた、この二週間でこちらの理解を進めている、ということなのかもしれない。互いが互いを理解するというのは摩擦を減らし、循環を良くし、いまとなつてはこの二人の空間が随分と馴染んでしまっていることにクロノは遅まきながらに驚いた。

そもそも、自分が他者を理解し、また理解されるなどという状況に陥るなどとは思ひもしなかつた。そしてそれを受け入れつつある自分にも、だ。

不思議な少女だ、と改めてクロノは思う。

近付かれても不快に思わせない独特の空気と言うのか。元來他者に対して警戒を働かせるクロノだが、最初からその兆候は薄く、いまとなつては警戒のけの字もない自分をこそ不安に思うほどだ。

「どうしたんです？ そんな難しそうな顔で。少しお茶でも飲んで落ち着かれてはいかがでしょう」

「ああ、ありがとう」

「いえいえ」

出されたお茶に礼を言いながら口へと運び……しつかりと飲んでから、クロノは頭を抱えた。

「えっ？ あ、あのクロノさん……う？ そんなに不味かったですか？」

「いや、そうじゃない……ちよつとした自己嫌悪だから気にしないでくれ」

他者に差し出された飲み物を何の警戒もなく口に含み、かつお礼まで述べ、その上そんな一連の動作を反射的に行つてしまった故の自己嫌悪だった。

まずい、とクロノは真剣に思う。この状況が続くのは極めてまずい。

横で小首を傾げているこの少女は、どうやら相当相性が悪い——見方によっては良いと言えるのかもしれないがそれは捨て置く——のだろう。どうにも距離感が掴めなくなるうえ、自分の立ち位置さえもあやふやになっていくような感覚さえする。

早急にかしめてもらおう。例えば状況が動かないにしても、監視役を誰かに引き継いでもらおう。そう決めて携帯導話を取りだした……その瞬間、まるで見ていたかのようなタイミングで着信を告げる音が鳴り響いた。

「もしもし。こちらクロノ」

『ラディターだ』

通話してみれば、相手は望んでいた相手だった。それも手間を嫌うラディター自身が連絡を寄越してきたということは、何かしら発展があったということだろう。これでこのぬるま湯のような生活からおさらば出来る、と嘆息し、

『状況が変わった。監禁は現時点で終了。速やかにマリア・ウォーキンスを殺害せよ』

——そして、思考が停止した。

『クライアントは娘を拉致・監禁することでジエーチャー・ウォーキンスを脅すつもりだったようだが、相手の方が一枚上手だったな。既にマリア・ウォーキンスを死んだものとし、悲劇譚ひげきたんとして大々的に公表、更には枢機卿になった自分への脅迫であると宣言することで民衆の同情を得、犯人への怒りを根付かせた』

以前マリアが言っていたそのままの展開だ。だが、生死を確認する前にそんな手を打つとは……どうやら本当にジエーチャーにとつてマリアという存在は、どうでも良いものらしい。

『クライアントは大慌てだよ。退路を断たれたクライアントは証拠隠滅のためにと依頼を殺害に切り替えたというわけだな。愚かな男だ』

ラディターは嘲笑いながら吐き捨てる。

『事ここに至っては殺すよりも生かしたまま相手の言質げんちの矛盾を突いた方が的確だろうに……』
といえ、我々は暗殺ギルド。依頼は依頼だ。金さえ貰えれば後は知らん。クロノ、君にもいらぬ迷惑をかけ続けたが、それも終わりだ。速やかに片付けて戻ってこい。以上だ』

言うだけ言って通話は切れた。クロノはしばし、通話が切れたことを示す機会音を聞き続けることしか出来なかった。

「クロノさん……っ？」

クロノが我に返ったのは、奇しくも話題の中心であったマリアに声を掛けられてのものだった。

「どうか、したのですか？」

クロノは携帯導話をポケットへしまうと、ソファーから立ちあがる。そしてこちらを案じているかのような視線を向けてくるマリアに対しクロノは——取り出した愛銃の銃口を向けた。

「……お前の監視任務は終わった。状況が変わり俺の任務はお前の殺害」と切り替わった」

淡々と告げる。マリアは一瞬顔を強張らせ、俯くと……ややあつて、

「そうですね。いつかそうなると思っていました」

笑みを見せたのだ。

「……何故笑う」

「あの人が私のために何かを切り捨てるなんて、絶対にしないですもの。だから今更抵抗もしませんよ。むしろこの二週間は望外ぼうがいな幸福でした。クロノさんはさぞ迷惑めいわくだったかと思いますが、それでも私は死の前にこんな温かな生活を得られただけでも、満足です」

それは、心底の笑みだった。嘘偽りではなく、この二週間こそが人生の至上だったのだと、彼女は本当にそう思っているのだ。

その花のような笑みは、ゆつくりと諦念ていねんの色へと変わる。

「……だから十分です。それに、クロノさんに殺されるのなら私も素直に受け入れられます」

「何故だ」

「私の死が、クロノさんの功績になるんでしょう？ クロノさんが生きていく礎いしずえとなれるなら……」

ただ無^む為^いに死ぬよりも、よっぽど有意義だと、そう思うんです」

スツと両手を広げる。銃口を前に、その死を受け入れようとする少女の顔は、悲嘆に涙するでもなく、恐怖に暮れるわけでもなく、ただひたすらに緩やかな笑みだった。

「……お前は、本当にそれで良いのか」

「スラムの苦境を潜り抜けてきたクロノさんからすれば、抗うことを諦めた弱者なのでしょう。その通りです。私は一人じゃ生きていけない。ただ生かされただけの操り人形。価値がなくなれば簡単に捨てられる程度のものなんです。そんな私が抵抗をして、何が起きますか？」

マリアは苦笑する。ゆつくりと首を横に振って、

「……もう、良いじゃないですか。あなたはあなたの仕事をしてください。私は私の運命を受け入れます。それだけなんです」

さあ、と催促するかのようにな歩を踏みこんでくる。

応じるようにクロノもまたトリガーに指を掛けた。これを引けば、マリアは死ぬ。

誰かの命を奪うことなど、数え切れぬほどにやってきた。今回も同じことをするだけ。そう、それだけなのに。

「っ——」

何故、何故こんなにも指が重いのか——。

そのどこまでも続くような無音は——しかし、まったく別の介入者によって霧散した。

「あーん？ こいつあいつたどういう状況だあ？」

突如部屋に入り込んできたのは逆毛の男だった。耳や口元、臉や手の甲、開かれた胸元など体のいたるところにピアスを取り付けており、それをジャラジャラと鳴らしながら近付いてくる男をクロノは知っている。

そもそもここは『スコーパーオン』が活動するために用いている隠れ家だ。ここにやってくる者などギルドの人間しかありえない。

だが、その男は考え得る限り最悪の相手だった。

「アズイー……」

「よお、クロノ。久しぶりだなあ？」

アズイー・ヘンベルト。ギルドの中でも名の知れた暗殺者だ。

「Lしこそ9とクロノより下だが、こなした暗殺の数はクロノよりもずっと上を行く男。だがそれは任務に忠実であるということではない。

この男は殺人を享樂とする殺人狂だ。特に女に対しては変質的なまでの嗜好を持ち合わせており、散々犯し、甚振つてから壊し、崩し、飾り立てる。もはや死体は人間の原型を留めていないほどに凄惨極まり、本人曰くアートだそうだが、死体の第一発見者が一人の例外もなく発狂しているところからも察することが出来るように、その美的感覚は常軌を逸している。

暗殺者としては失格とも言える所業だが、この世界は結果が全て。多くのターゲットを殺し、バ

れるべきをしなければ何も咎められることもない。

クロノは別段他者の殺し方に文句をつける気はないが、到底理解出来ない嗜好と言えた。実際話が合うはずもなく、同じギルドの人間でありながら言葉を交わしたことさえ数える程度しかない相手だ。

だが、そうであつてもわかる。アズイーがマリアに向ける視線が獲物を見つけた獣のそれに変わったことを。

「ほお。なかなかの上玉じゃねえか、クロノ。お前もいよいよ俺様の芸術つてのがわかつてきたか？」

「お前と一緒にするな。これも任務だ」

「任務？ 殺しじゃなくてかよう？」

「そう。誘拐だ。彼女の父親を脅すための人質というやつだ」

「ほおおおお？ なら何でお前はその人質に銃口を向けてんだ？」

「……ついさっき任務内容が殺しに変わった。だから実行しようとしていた。そこにお前が割り込んできただけだ」

「はあん。そいつはすまないことをしましたねえ。だが……ああ、そいつは好都合つてやつだなあ」

「……何をやる気だ」

「ただ殺すのは勿体ねえ。それにまだ酸いも甘いも知らねえ処女の匂いがブンブンするぜ。死んじまう前に女の喜びつてのを教えてやるのも一興だろう？」

下卑た笑みを隠そうともせずマリアに迫るアズイーに、クロノは意識する前に口を開いていた。

「こいつは俺の獲物だ。暗殺対象の横取りは御法度だと知ってるだろう？」

「ああ、そりやもちろんわかてるよ。俺様はお前の功績を掠め取ろうとするわけじゃねえ。ただちよつと殺す前に遊ばせろつてだけなんだ。そうカリカリすんなよ」

そう言われてしまえば、クロノにもうアズイーの行動を止める理由はない。クロノの任務はマリアの殺害。結果が全てのこの世界は、逆を言えばその過程は問われない。

アズイーがマリアに何をしようと、最終的にクロノが殺すのならば問題のない話。それが『スコピーオン』における『結果』というものだ。

そうして口を閉ざしたクロノの横を、アズイーは舌舐めずりしながら通り過ぎていく。

……何故か、拳を握り締めていた。

「というわけでお嬢ちゃん、これからハッピータイムだ。俺様が死ぬ前に女としての一花咲かせてやるからありがたく思うんだなあ！」

「っ……………!? あ、や……………」

押し倒される音。服が引き裂かれる音。それを背後に聞きながら、クロノは自分でも理解出来ない感情に激しく揺さぶられていた。

この、胸に渦巻く感情は何だろうか？ 身体を激しくせつつく衝動、理由もわからず溢れ出る激情。わからない。わからないからこそ、狂おしい。

自分は何がしたい？ 何故血が滲むほどに拳を握り締めている？ 理解出来ない。ああ理解出来ない。理解出来ないが――。

「や……助けて、クロノさん!!」

「――ッ!」

その言葉を聞いたとき、感情の全てが振り切れた。

思考の全てを凌駕^{りようが}して身体が瞬時に動き、振り返りさまに銃の引き金を引いていた。

放たれた銃弾は――いままさにマリアの肌に手を伸ばそうとしていたアズイーの眉間を的確に貫いていた。

「……あ?」

呆然とした様子で呻いたアズイーは、そのまま後ろへと崩れるように倒れこむ。数多の人間を殺してきた殺人狂の、あまりにあっけない最期だった。

だがそれは状況が味方をしたただけだ。クロノはマリアの悲鳴を聞いて咄嗟に、しかもほぼ無意識に行動に出た。だからこそ敵意や殺意といったものが感じられず、アズイーは回避することが出来なかったのだ。普通に戦つていれば、もっと手こずっていたことだろう。

クロノはそつと銃口を下ろすと外套を脱ぎ、無造作にマリアへ投げつけた。

慌ててそれを受け取ったマリアは自分の衣服がボロボロで肌が随分と露出していることを今更ながらに思い出し、わずかに顔を赤くして外套で身を隠した。

そんなマリアを視界の隅に置きながら、クロノは大きく嘆息してソファーに座り込む。

「……何をしているんだろうな、俺は」

今更すぎる発言だった。

さっきまで殺そうとしていた相手を助け、あまつさえ同じギルドメンバーを殺してしまった。ギルドにおける身内殺しは御法度だ。相手がただの下っ端であればまだ言い訳も出来ようが、ギルド内でも有数の実力者であるアズイーとなればもはや言い逃れは出来ないだろう。

ギルドに対する明確な裏切り行為。下手をすればギルド総出で報復されかねない状況だ。

ただ生きることだけを望むなら、これはあまりに悪手だ。しかし、

「クロノさん……ありがとうございます」

渡した外套を抱くように握り締め、マリアは頭を下げた。ベッドの上にポタポタとこぼれ落ちる雫は涙だろうか。

「私……本当にクロノさんなら殺されても良い、って思ってたんです。こんな私の命でも、誰かの助けになるのならそれはとても良いことのはずだ、ってそう思ってた……。でも、この人に襲われるのは凄く怖かった。こんなのは嫌だ、って思ってしまったんです」

自分の存在理由が欲しかった。存在していたという証が欲しかった。死ぬこと自体は、良い。けれどそれを無意味なものにしたくなかった。おそらくマリアの考えはそんなところなのだろう。

けれど、彼女は気付いているのだろうか？

「……けど俺は、お前から初めて『拒否』の言葉を聞いたよ」

「ッ！」

「さらったときも、俺に殺されそうになった時も……そしてきつとこれまでも、お前は何でもかんでも受け入れた。仕方ないことなんだと諦めてきた。そんなお前が『嫌だ』と、明確に言葉にした」

それは、

「……そうだよな。誰だつてそうだ。無意味な死は怖い。自分の生きていないままに消えるなんて、考えるだけで恐ろしい」

そう。だからクロノは生きる目的などないのに、あの地獄を戦いながらも生き抜き続けた。自分はただ死ぬために生まれたわけじゃないんだと、無言で世界に叫び続けながら……。

「今更だけど、なんとなく理解したよ。俺がお前を見ているとどうにも落ち着かない理由が」

「それは……」

「似てるんだ。境遇だけじゃない。抱えてる虚無感きよむそのものが、な」

「虚無感……」

「生きている。でも生きる目的がない。それを欲して、でもまだ答えは出ていない」

「……そうですね。その通りです。でもやっぱり、私はクロノさんほど強くないですよ。そのために必死に生きようという気力が——」

「ない、と？ それはお前がそう思ってたただけだろう。本当に無気力だというなら、さっきお前が拒

「否する理由がない」

「……」

「俺とお前の違いなんて、戦う力があるかないか程度の差でしかない」

戦う力があつたから、抗つた。戦う力がなかつたから、恭順した。

ただそれだけ。そう、それだけのことでしかない。

クロノはソファから立ち上がる、部屋の出入り口へと向かう。マリアを監禁するために、中からも鍵を使わないと開けられない仕様になっている（その必要性はなかつたと言えるが）扉を無造作に開け放つた。

「逃げろ」

「え……？」

「俺は同じギルドの人間を殺した。裏切り者になってしまった。だからこれ以上、お前に危害を加える理由もない。だからお前は逃げろ」

「そんな……。く、クロノさんはどうするんですか、これから」

「言つただろ。俺だつて何の理由もないままに死ぬつりなんて毛頭ない。ギルドの連中がこの事実に関付いたら刺客が差し向けられるだろうが……まあ生き抜いて見せるさ。誰かに追われて生きるなんてのも、慣れてるからな」

結局、スラムから抜け出してもそんな状況に落ち着いてしまった。誰かに狙われて常に生死隣り

合わせの生活を続けていく。どうやら自分はどうあつてもそんな世界から逃れられぬようだ。

「俺のことなんて気にするな。お前はお前の生活を続ければ良い。俺も俺の生活を続けていく。それだけだ」

「……」

マリアは無言のまま立ち上がり、ゆっくりとした動作で近付いて来る。渡した外套に身を包み俯きながら歩く彼女は、一体何を思っているのだろう。

……いや、考えるまでもない。こっちの勝手な理由でさらわれて、更に勝手に解放されて。殺されそうになり汚されそうになり。それで怒らないわけがない。

マリアがすぐ目の前、つまり扉の手前で足を止めた。そしてこちらの服をギョツと握ってくる。その表情は、俯いているためにわからない。

だがこうも巻き込まれたのだ。一発殴られるくらいは覚悟するか、と思った瞬間だった。

「あなたは、勝手です！」

頬を叩かれた。痛くはないが、その手はとても熱かった。

「あなたは、ずるいです！」

そして予想外の二発目が飛んできた。思わず目を瞬かせた先で、マリアは目尻に涙を浮かべながらこちらの襟首を掴んで、叫ぶ。

「ここから逃げろ？ 逃げてどこに行けつて言うんです！ あの人のことだから私はもう死んだもの

として喧伝けんでんされているのではないですか!？」

言われてみればその通りだった。既に死んだものと発表された彼女が戻ればどうなるか? 監禁されるか、下手をすれば殺されてしまうかもしれない。彼女の父親にとって、マリアというのはあくまでも道具でしかないのだから……。

恨まれるのも仕方ない。それだけのことをしてかしたのだから、と。

……だがクロノの予想はやや正しく、大部分に間違っていた。

「それに、『生き抜いて見せるさ』とか、簡単に言わないでくださいよ!」

「は……?」

「どうして何も言わないんですか? 私を助けたりしなければこんなことにならなかったのに、これが当然のことなんだみたいな態度で……少しくらい憎まれ口叩いてもらわなくちゃ、私が納得いかないんです!」

何を言っているのだろう。クロノはまったく理解出来なかった。

この状態で、ここまでのことをしておきながら、こちらが文句を言う? そんな発想、普通至らない。

「……結局それも俺自身の決断で起こったことだからな。お前のせいにするのはお門違いだろ」

「そんな風に言われたら、私だって同じですよ……」

「それは違う。俺のは自分の意志だが、お前のそれに意志はなかった。だからお前には俺を怒り恨

む権利がある」

「怒り？ 恨み？ ……そんなの、何もありませんよ。だって私をさらったことや、あの人が私を切り捨てたことに、クロノさんの意志は介在していないじゃないですか」

「それは——」

「だから言ったんです。『同じ』だと。もしそれでクロノさんが責任を感じると言うのなら……！」
顔を上げ、マリアがこちらを見上げる。

目尻に涙を浮かべながら、それでいて吸い込まれそうな瞳には真摯しんしな光が満ちていた。

「私も一緒に連れて行ってください！」

「は……う？」

呆然とした眩きは、もはや何度目だろうか？

だがそんなクロノに対し、マリアは顔を近づけて更にまくし立てる。

「私、もう行く場所なんてないですし、一人で生きていける自信もないです。だから——」

「お前はバカか？ 俺は狙われるんだ。戦いが日常茶飯事の生活だぞ。いつ死ぬかわからないつのに、わざわざついて来るなんてどうかしてる」

「それでも構いません。足手纏いにならないように頑張りもします。だから！」

思わずたじろいでしまうほどの気迫だった。だが、本当にわからない。

「何故だ？」

何故そこまで頑なに共に行こうとするのか。

危険だということくらいわからない人間じゃないということは、それこそ三週間ほどの共同生活でわかつている。一人で生きていける自信がないなどと言ったが、家事能力は完璧だし、人当りの良い性格と物覚えの良さがあれば働いて暮らすことも簡単だろう。

だから問う。何故、と。

「……私が、私としてここにいる存在理由。生きていたいと思える理由。それを見つけたんです」
「……それは？」

☆ ☆ ☆

「クロノさんです」

断言した。してしまった。

「」

こうして呆然としたクロノを見るのは何度目だろうか、とマリアは崩れそうになる口元を引き締めて、続ける。

「私、本当に楽しかった。この数日の生活。終わって欲しくない、って本当に思ったんです」
空虚だった日々。飾りだけの自分。どこまでも孤独だった生活。

んにとつての生きる理由にもなりたい。勝手なこと言ってるってわかってます。でもこうも思ってます。私とクロノさん、二人でならきつと支え合っていけるって！」

我ながらとんでもない言い草だと思う。けれどこれまでろくに人との繋がりがなかったからこそ、出てくる言葉は遠慮もないストレートな物言いとなってます。

でもそれでも良い。相手に伝わらないような装飾だらけの言葉なんていまはいらない。きつとこの人にはそんなの届きはしない。

だから、思わず赤面してしまうし、恥ずかしくて嘔みそうにもなってるし、ふるふると腕も震えているけれど、全てを押し殺して伝えるのだ。

真っ直ぐな想いを。

「私をさらった責任を取ると言うのなら、あなたが生きるその道の果てまで、さらい続けてください」

☆ ☆ ☆

「……本当に、勝手なことを言ってくれるな、お前は」

本当に、言いたいことをズバズバと言うものだ。飾り一つない、ただただ真摯な言葉は、勘違いなどさせない力を持っている。言い訳など出来ようはずもない。

「口下手ということもありますけど……勘違いされたくないですから、これで良いかと」

「相変わらず、そういうところお前は図太いな。尊敬するよ」

突飛な行動と、そこに込められた想いの強さ。マリアという少女は、見てくれに反してとんでもない行動力を秘めていて、時には豪胆な態度を示す。そんなことがすぐに納得出来るほどに、クロノもまたマリアのことを理解していた。

自分が誰かを理解し、共感し、罪悪感を持つことがあるなど、思いもしなかった。

振り返る。彼女と過ごしたこの三週間を。それで思うことは、

「……確かに、楽しかったな」

もはや誤魔化すことも出来ないだろう。ああ、確かに楽しかった。安らぎがあった。

ラディターの連絡を待っていたのは、早く終わって欲しかったからじゃない。終わらずに続くことを望みながらも、それがいずれ壊れるものだとかわかっていたから、その安寧に浸っているのが怖かったからだ。

けれど結局助けてしまった。殺せなかった。その理由など、事ここに至ってはもう明白だろう。

「……言っておくが、多分お前が思っている以上に大変な生活だぞ」

「あ……！ そ、それじゃあ！」

「ま、お前が帰る場所を失った責任は俺にある。巻き込んだのも俺だ。なら最後まで面倒を見るのも、仕方ないことなんだろう。だが最後にもう一つだけ確認させてもらう」

そととクロノはアズイーの返り血を浴びて赤く染まった手を差し出す。

「この血に塗れすぎた死神の手を取って、それでも支えるだなんて言えるのか？」

「言いますとも」

反応は瞬時に。血で汚れることも厭わず、いとも容易くその手は握り返された。

「だってそれが、私が持った初めての生き甲斐ですから」

握られた手は温かく、見下ろす表情は嬉しそうな笑顔で。

ああ、と。クロノもまた苦笑しながら思った。

これは俺の負けだな、と。

「……なら、勝手にしてくれ」

「はい、勝手にします！」

☆ ☆ ☆

そこから始まる二人の逃亡生活。

無論、事実を知った『スコープオン』は裏切り者抹殺のために幾多もの刺客を送り込んできたが、クロノはそれを何度も撃退してのけた。

そのうち軍にも情報が流され、マリアを誘拐した犯人として追われる羽目になる。

逃亡生活は激化の一途を辿るものの、スラムで生活していたときのような空虚さはなかった。

隣に理解者がいる。共にどこまでも行くのだと豪語する者がいる。殺伐とした日々の中で、それでも『生きています』と実感出来るのは間違いなく彼女のおかげだろう。文字通り、支えられていた。

生きる目的を互いに手に入れた。互いが互いの支えだった。

それが始まり。出会い。たった半年前の話。そしていままも続く物語。

そう、それはこれからも、まだまだ続いていく――。